«СИ ДЕРЖАТЬ ГОБИНО»の解釈について
―『原初年代記』6532（1024）年の記事への註のために―

栗原成郎

『原初年代記』によれば、キエフ大公ウラジーミルの異教からキリスト教（東方正教）への改宗は性急の印象を免れない。彼はキエフおよびノヴゴロドにおける偶像神殿の建立による異教再興の試み（980年）から10年も経たないうちに（988年）ルーシをキリスト教に改宗させた。キリスト教受容後まもないキエフ・ルーシにおいてはキリスト教は社会の上層部の宗教にとどまっていたが、ルーシがモンゴル・タタールの支配下にはいった13～14世紀には全階層の宗教となった。しかし教会史家のなかには都市部以外の全ルーシの改宗を15世紀まで下げる者もいる(1)。

教会側の資料である年代記はキリスト教受容の最初の世紀である11世紀にвълхвы (вълхви, волхвы, волсви) に煽動されて起こった異教徒たちの反乱を一度ならず記録している。вълхвы (単数вълхвъ) とは農耕・牧畜呪術儀礼、治療、占いなどに携わっていた呪術師たちであり、ある面においてはフィン系民族のシャーマンに近い異教司祭たちであった、と考えられる。

『過ぎし歳月の物語』（«Повесть временных лет»）あるいは『原初年代記』（«Начальная летопись»）の1024年の項にはスーズダリにおける飢饉と暴動が記されている。それにはволхвыが深く関わっている。

«Памятники литературы Древней Руси. Начало русской литературы. XI--XII века» 所収の «Повесть временных лет» の 1) О.В.Творогов による校訂テクストと2) Д.С.Лихачев による現代ロシア語訳ならびに二種の邦訳 3) 國本哲男・山口巌・中条直樹他訳『ロシア原初年代記』（以下、日本古代ロシア研究会訳『ロシア原初年代記』と呼ぶ）と 4) 除村吉太郎訳『ロシヤ年代記』の当該箇所を以下に掲げ、2) のリハチョフ訳および 3)、4) の日本語訳とは異なるテクスト解釈の一つの可能性を検討する。

1) В лѣто 6532. Ярославу сущю Новѣгородѣ, приде Мьстиславъ ис Тьмутороканя Кыеву, и не прияша его кыяне. Онъ же, шедъ, съде на столѣ Черниговѣ, Ярославу сущю Новѣгородѣ тогда. В се же лѣто въсташа волъ сви в Суждали, избиваху старую чадь *по* дьяволю наущенью и бѣсованью, глаголюще, яко си держать гобино. Бѣ мятежь великъ и голодъ по всей той странѣ; идоша по Волзѣ вси людье в Болгары, и привезоша *жито*, и тако ожиша. Слышав же Ярославъ волхвы, приде Суздалю; изъимавъ волхвы,

расточи, а *другыя* показни, рекъ сице: «Богъ наводить по грѣхомъ на кующдо землю гладом, или моромъ, ли ведромь, ли иною казнью, а человѣкъ не вѣсть ничтоже»

2) В год 6532 (1024). Когда Ярослав был в Новгороде, пришел Мстислав из Тмуторокани в Киев, и не приняли его киевляне. Он же пошел и сел на столе в Чернигове; Ярослав же был тогда в Новгороде. В тот же год восстали волхвы в Суздале; по дьявольсмоку наущению и бесовскому действию избивали старшую чадь, говоря, что они держат запасы. Был мятеж великий и голод по всей той стране; и пошли по Волге все люди к болгарам, и привезли хлеба, и так ожили. Ярослав же, услышав о волхвах, пришел в Суздаль; захватив волхвов, одних изгнал, а других казнил, говоря так: «Бог за грехи посылает на всякую страну голод, или мор, или засуху, или иную казнь, человек же не знает, за что».

3) 6532 (1024) 年

ヤロスラフがノヴゴロドにいたとき、ムスチスラフがトムトロカニからキエフにやって来たが、キエフの人々は彼を受け入れなかった。彼は立ち去ってチェルニゴフの座についた。ヤロスラフは当時ノヴゴロドにいたが、この年に占師たちがスズダリで蜂起し、悪魔の教えと唆しによって、「これらの人々は豊かな貯えを持っている」と言いながら、裕福な人々を殺した。この国の全域にわたって大きな反乱と餓えとが起った。すべての人々がヴォルガに沿ってボルガリのもとに行き、[穀物]を運びこんで来たので、（人々は）生き返った。

ヤロスラフは占師たちのことを聞いてスズダリにやって来た。占師たちを捕えて追放し、また他の者たちを罰して、「神は罪のためにあらゆる国に餓え、悪疫、旱魃、あるいは他の罰を下される。それなのに人間は何も知らないのである」と言った。

4) 6532年　ヤロスラフはノヴゴロドにいた。その時ムスチスラフがトムトロカーニからキエフに来った。しかして彼をキエフの人々は受け容れなかった。彼は去って、チェルニゴフの玉座についた。一方ヤロスラフはその時ノヴゴロドにいたのである。

[スーズダリにおける妖術師等の叛乱]

この年スーズダリにおいて妖術師等が叛乱を起し、悪魔(チャヴォル)及び悪鬼(ベース)の教唆に

よって老いたる人々を打ち殺し、彼らが富を保持しているといった。全国に大なる叛乱と飢饉が起った。すべての人々がヴォルガ河に沿うてボルガル人のもとへ赴き、裸麦を運び来り、かくして蘇った。ヤロスラフは妖術師等のことを聞き、スーズダリに来って、妖術師等を捕え、ある者は流し、他の者は処刑して、かく言った「神は罪悪に対する罰として各の土地に或いは飢饉を、或いは疫病を、或いは旱魃を、或いはその他の処罰を与えるのであり、人間は何も知らぬのである」と。

1024年にスーズダリにおいて生じた事件は、邦訳で読むかぎり、その年その地方一帯に飢饉があり、飢饉の原因を“裕福な人々が豊かな貯えを持っている”（日本古代ロシア研究会訳）ことあるいは“老いたる人々が富を保有している”（除村訳）ことにある、すなわち、一部の持てる人々が穀物の貯え・富を独占・隠匿していることにある、と睨んだ“占師”たちないし“妖術師”たちがその元凶たる有産階級の人々を殺害したことが引き金となって暴動が起こり、ヤロスラフ公が鎮圧に当った史実であるかのように思われる。

この記事の内容は分かりにくい。果たして волхвы は大暴動（"мятежь великъ"）の首謀者だったのか？"старая чадь" の殺害に волхвы に煽動された民衆も加わったのか？ヤロスラフ公には "старая чадь" を救出する意図はあったのか？ヤロスラフ公は волхвы を捕えて、流刑ないし懲罰に処した（"изъимавъ волхвы, расточи, а *другыя* показни"）が、それで反乱は収まったのか？すべての人々はヴォルガ・ブルガール人のところへ行って、穀物を手に入れて飢饉を免れたのであり、叛徒が隠匿物質のあるはずの“金持”の穀物倉を解放した様子が見えないのはなぜか？"старая чадь" のところには実際には穀物の豊かな貯えなどなかったのではなかろうか？"старая чадь" は“裕福な人々”を指すのか？

ソビエト期のロシアの歴史家の多くは1024年のスーズダリにおける事件を一連の農民運動（"движения смердов"）の一つと見る。例えば、Б.Д.Греков は次のように言う。

「社会の下層民は餓えていた。"старая чадь" — 裕福な人々（богатые люди）— は餓えてはいなかった。彼らには莫大な貯えがあった。つまり、彼らは"гобино"を隠匿していたのである。彼らに対して民衆の怒りが向けられた」(2)

この出来事をキエフ・ルーシにおける階級闘争の一例とは見ない立場もある。

А.Н.Афанасьев は、1024年のスーズダリにおける волхвы による "старая чадь" の殺害の出来事を一種の“魔女狩り”と解し得る可能性があることを示唆した(3)。"старая чадь" を "ведьмы"（魔女）の嫌疑をかけられた女性たちと見ることを可能にしている資料に『ノヴゴロド第4年代記』（«Новгородская IV летопись»）があ

る。『ノヴゴロド第4年代記』は15世紀に編纂されたもので、成立の時期が『原初年代記』よりもはるかに後代であるにもかかわらず、1024年のволхвыに関する記事は消失した古い資料に基づいたもので（волхвыに関する情報源は複数あったと推定される）、情報としての価値を失ってはいない(4)。

Въсташа вълъсви лживи в Суздале и избиша старую чадь бабы, по дьяволю научению и бесованию, глаголюще си дрьжат гобино и жито, и голод пущають. И бе мятежь велик и глад по всеи стране тои, яко мужю своя жена даяти, да ю кормять собе, челядином. И идоша по Волзе вси людие в Болгары, и привезоша пшеницю и жито, и тако от того ожиша. Слышав же Ярослав вълхвы, прииде к Суздалю, и изимав убиица ты, и расточи, иже беху бабы избили, и домы их разграби, а другыми показни. И устави ту землю, рек сице: "Бог наводить по грехом на коюждо землю гладом, или мором, или ведром, или иною казнью, а человек не весть ничтоже; Христос Бог един есть на небесе".(5)

スーズダリに偽り者の呪術師らが現れ、悪魔の教唆と狂乱とにより、老いたる人々・女たちを、これらの人々は収穫と穀物を横取りし、それによって餓えを招いている、と言って、殺害した。その地方一帯に大いなる暴動と飢饉があり、夫は自分の妻を、食べさせるために奴隷として売り渡さねばならないほどであった。ヤロスラフは呪術師らのことを聞いてスーズダリに来て、かの人殺しどもを捕え、女たちの殺害に関わり、彼女らの家を略奪した者たちを流刑に処し、その他の者たちには懲罰を与えた。ヤロスラフはその地を鎮定し、かく言った。“神は人々の罪のゆえにそれぞれの地にあるいは飢饉、あるいは疫病、あるいは旱魃あるいは他の懲罰を下されるが、人間はなにひとつ知らずにいるのである。天にいますのはただひとりキリストなる神なのだから。”

このテクストでは«вълъсви...избиша старую чадь»とあり、 старая чадьとбабыはapposition に置かれ、殺害されたのは女たち（老女たち）である。殺害の理由は«си дрьжат гобино и жито, и голод пущают»“これらの人々は収穫と穀物を横取りし、それによって餓えを招いている”からである。社会的地位のはっきりしない老女たちが地域の人々を飢饉に瀕せしめるほどに多量の穀物を独占・横領・隠匿するという状況は想像しにくい。殺害されたбабыは民間伝承でいうведьмыである、と考えられる。民間信仰においては疫病、旱魃、凶作は魔女たちの妖術によってひき起される。魔女たちは空高く舞い上がり、雨雲を追い散らして旱魃の原因をつくり、また独特の方法で穀物を独り占めにする。魔女たちは麦などの穀物の草の茎を

折り曲げて結び目をつくり、他人の収穫物を横取りして自分の納屋に集める、と信じられた。穀物畑で穀草の茎を折り曲げることを民俗語彙で заломы とよぶ。穀草の茎を束ねて穂が地に垂れ下がるように折り曲げ、あるいは茎を束ねて縒り合わせて結び目をつくり、穂を地面の中に突っ込む場合を закрутка と言う。заломы や закрутка は魔女たちの仕業であり、凶作の原因となり、飢饉につながる(6)。魔女は老婆である、と想像された。старая чадь が быбы であるとすれば、老婆たちは穀物の生長を妨げ、収穫に悪影響を与え、飢饉をもたらした元凶として糾弾されたことになる。

しかしながら、старая чадь は女性とはかぎらない。«Повесть временных лет» を含む «Владимрский летописец»（16世紀）には1024年にスーズダリにволхвы が現われて"年老いた男たちと女たち"を凶作と飢饉の原因に関わる者として殺害したことが誌されている。

В се же лѣто явишася волсви Суждальскои земли, избиваху старых муж и женъ, глаголя: "си держат гобину". И мятежь великъ и голот по всеи земли тои. И Ярослав въ свѣ те казнѣ, а иныя е росточи и рече: "се за грѣхи наша богъ наводит на ны." (7)

三種の年代記から明らかなように、волхвы はスーズダリ地方を襲った飢饉を契機として старая чадь を殺害することによって活動の舞台に登場する。年代記作者によれば старая чадь を殺したのは волхвы であり、それ以外の何者でもない。волхвы は старая чадь を弾劾し、殺害する特別の権限をもっていたかのように思われる。『原初年代記』の編纂者は волхвы の行為を "по дьяволю наущенью и бѣсованью"（悪魔の教唆と狂乱による）と非難する。"по дьяволю наущенью и бѣсованью" を "悪魔の教えと唆しによって"（日本古代ロシア研究会訳）あるいは "悪魔(デャヴォル)および悪鬼(ベース)の教唆によって"（除村訳）とする翻訳では бѣсование の意味が充分には伝わらない。бѣсование はキリスト教徒の目には"狂乱""躁狂"としか映らない、悪霊に取り憑かれた状態・行為であろう。Н.Н.Велецкая はそこに歌と旋回の踊りを伴う儀礼の行為を想定する(8)。волхвы による старая чадь の殺害が儀礼的性格をもつとすれば、この異教の儀礼の目的は何か？この問いに対する答えの鍵は волхвы による старая чадь 弾劾の言葉 "си держать гобино" にある。

中世ロシア語の гобино あるいは гобина は богатство（富）の意味のほかに изобилие земных плодов（豊穣）、урожай（収穫、収穫物）の意味をもつ(9)。一方、держати (дьржати) は多義的であるが、задерживать, не отпускать（抑える、

阻止する、阻害する）の意味を基本的な語義の一つとしてもつ(10)。Н.Н.Велецкая は、『原初年代記』における "держать гобино" の表現を "задерживают рост зерна"（穀物の生長を妨げている）、"создают препятствие урожаю"（収穫の阻害の原因となっている）の意味に解釈し得る、と考えている。старая чадь の "старый" は、Н.Н.Велецкая によれば、年齢的な意味のほかに "почитаемый", "почтенный"（尊敬すべき、尊敬に価する）の意味がある。集落の最も尊敬すべき老人をあらかじめ "тот свет"（彼岸、来世）に送るという行為（殺害）は、11世紀においてはまだ農耕儀礼的機能を担い、儀礼的性格を有してはいたが、すでに偶発的な行動場面、退化した風習となっていた、とН.Н.Велецкая は見る。つまり、волхвы は、迫り来る凶作を未然に防ぐために、高齢世代の最も尊敬すべき代表者たちを"来世"へ儀礼的に送り出した、という解釈に立つ(11)。

И.Я.Фроянов の論文 »Волхвы и народные волнения в Суздальской земле 1024 г.» は Н.Н.Велецкая の見解を敷衍し、史学的に発展させた研究として興味深い(12)。И.Я.Фроянов は1024年のスーズダリ地方に生じた事件を農民運動、蜂起と見る従来のソビエト史学の立場を採らない。彼は、『原初年代記』のテクスト "въсташа волъсви в Суждали" の въсташа を"поднялись" (Лихачев, Романов) や"восстали" (Тихомиров) の意味には取らず、"объявились, появились" の意味に解する。したがって、「占師たちがスズダリで蜂起し」（日本古代ロシア研究会訳）、「スーズダリにおいて妖術師等が叛乱を起し」（除村訳）の意味にはならず、「スーズダリに呪術師らが現れ」の意となる。「他に解釈はできない。なぜなら、年代記作者は、ヤロスラフ公に言及しつつ、公が耳にしたのは "волхвы" のことであり、"старая чадь" のことでもスーズダリで勃発した "мятежь великъ" のことでもないことを示しているからである」(13) И.Я.Фроянов は "старая чадь" を"貧しい人々を収奪する地主たち、富める人々"とは見ない。彼は、11世紀のキエフ・ルーシにおいては社会関係はまだ封建制へ移行していなかったため、"старая чадь" を土地所有者と拡大解釈することはできないと考え、"старая чадь" は氏族社会の長老たち、共同体の指導者層である、と想像する。

"старая чадь" が餓えた民衆の目から穀物を隠している富裕な社会層であるとするならば、その事実は周囲の人々にとって不思議なことではなかったはずである。しかし、年代記によれば、穀物の行方、食糧不足の原因を知っていたのは、霊視者をもって自ら任じる волхвы だけであった。彼らだけが民衆に不幸をもたらす原因 — 収穫を妨げている старая чадь の特質 — を知っていた。「ここで意味されていたのは形而下的な問題ではなくて、異教的世界観の体系の中に編み込まれている超感覚的な事柄である」(14)

異教の習俗によれば、収穫に悪影響を及ぼす人々の生命は集団にとってきわめて

望ましからざるものであった。それゆえに、共同体の幸福を確保するために彼らは亡き者にされた。すなわち、волхвы が старая чадь を殺したのは、старая чадь が自分たちの穀物倉に飢えている人々に必要な穀物の貯えを隠匿していたからではなくて、長老であり、かつ指導者であるという彼らの人間的な特質のゆえに、穀物の生長を妨げ、共同体の人々に致命的な飢饉を生ぜしめていたからである。

原始社会においては、フレイザーが"老人政治"(gerontocracy)と呼んだ、老齢な有力者たちによる寡頭政治が行なわれた。支配者たちは彼らの権力を保証する呪術師たちの評判の基盤の上に立っていた。呪術師が酋長や王になることも稀ではない。呪術師・王は雨司 (rain-maker) を兼ねる。ナイル河上流地方の諸部族の酋長はおおむね雨司であり、酋長としての権威は彼が雨を降らせる技術を心得ているという民衆の信仰にかかっている。「酋長は固有の呪力をふるうことによって富を蓄積するけれども、しばしば、否多くは悲惨な最後をとげることになる。旱魃に際して怒った民衆は、雨の降るのを妨害しているのは彼だと信じて、大挙して彼を殺してしまうのである。」(15) 「公的呪術師の占める地位は、全く不安定きわまるものである。彼が雨を降らせたり、太陽を照らせたり、土地のみのりをもたらす力をもっていると固く信じこんでいる人々は、当然のことながら旱魃や飢饉を彼の無責任な怠慢あるいは故意の計略であるかのように考え、その結果として彼を罰することになるからである。」(16) フレイザーによれば、このように、共同体の指導者が呪術的な、あるいは超自然的な力をもち、その効験によって土地を豊穣にし、その他の福祉をもその民に与えることができるという信仰は、インドからアイルランドに至る全アーリア人の祖先たちによっても分け持たれていたという(17)。

1024年のスーズダリにおける呪術師たちによる老齢者殺害の出来事は上に引用した三つの年代記において挿話的事件として記録されているが、『原初年代記』は長老・指導者の殺害について、『ノヴゴロド第4年代記』は魔女の殺害について、『ウラジーミル年代記』は高齢の男女の殺害について言及している。このように、三つの年代記のテクストは細部において相異はあるが、殺された人々がいずれも高齢者であることにおいては一致している。この高齢者殺害は、凶作による飢饉に際して、共同体の福祉のために老齢者を"彼岸"の祖先のもとへ送り出すというスラヴ人古来の異教的人身供犠の余波である、と考えられる。この儀礼を司ったのは異教司祭たる呪術師たち (волхвы) であった。ヤロスラフ賢公治世下の11世紀前半のキエフ・ルーシの北東部はいまだ異教の信仰と習俗を脱していなかった。И.Я.Фроянов は、ヤロスラフ賢公もルーシの北東部の異教徒住民の信仰に関しては寛大であったことを史料に基づいて示している(18)。

Н.Н.Велецкая および И.Я.Фроянов の見地に立てば、年代記に描かれた1024年のスーズダリにおける呪術師たちによる老人殺害は、農耕呪術の儀礼の場面であり、

農民一揆ないし反封建制的階級闘争の光景ではない。しかしながら、老人殺害という農耕呪術の儀礼の具体的なプロセスについては年代記はなにも記述していない。旱魃に際して人形を水に沈める降雨呪術や、一定の民間暦に従い人形を畑で焼く豊穣祈願の農耕儀礼は、昔の人身供犠の名残りであると一般に考えられてはいるが、その古型の一例を類推的に1024年のスーズダリの事件に求めることは早計にすぎるであろう。

1024年の出来事に限らず、年代記に記されている "волхвы" による一連の"暴動"は、異教ルーシの社会関係・経済構造・価値体系・精神文化・生活文化の新たな資料的見直しのもとに再検討さるべき問題であろう。

ここでは『原初年代記』中のテクスト "си держать гобино" を"これらの人々は収穫の妨げとなっている"と解する立場を概観するにとどめた。

★　　★　　★

わが心なぐさめかねつ
　さらしなやをばすて山にてる月をみて
　　（『古近和歌集』巻第十七・雑歌上）

<テクスト>

1. Повесть временных лет. В кн. «Памятники литературы Древней Руси. XI - начало XII века». М., 1978.

2. Лаврентьевская летопись. В кн. «Полное собрание русских летописей». М., 1962.

3. 『ロシア原初年代記』、訳者代表・國本哲男、山口巌、中条直樹、名古屋大学出版会、1987年。

4. 『ロシヤ年代記』、除村吉太郎訳、弘文堂、1946年。

註

(1) G.P.Fedotov. *The Russian Religious Mind. Kievan Christianity: the 10th to the 13th Centuries*. Harper Torchbooks, NY, 1960, p346.

(2) Б.Д.Греков. *Киевская Русь*. М., 1949, стр. 256.

(3) А.Н.Афанасьев. *Поэтические воззрения славян на природу*. т. III. М., 1869, стр. 507-508.

(4) Я.С.Лурье. *Общерусские летописи XIV --XV вв.* Л., 1976, стр.101.

(5) *Полное собрание русских летописей.* т. IV, ч.1, Петроград, 1915, стр.111-112.

(6) Д.К.Зеленин. *Восточнославянская этнография.* М., 1981, стр. 70-71, 397.

(7) *Полное собрание русских летописей.* т.XXX. М., 1965, стр.44.

(8) Н.Н.Велецкая. *Языческая символика славянских архаических ритуалов.* М., 1978, стр.66.

(9) *Словарь русского языка XI ~ XVII вв.* вып. 4. М., 1977, стр.50.

Словарь древнерусского языка (XI ~ XIV вв.). т.II. М., 1989, стр.341.

(10) *Словарь русского языка XI ~ XVII вв.* вып. 4. М., 1977, стр.224.

Словарь древнерусского языка (XI ~ XIV вв.). т.III. М., 1990, str.239-240.

(11) Н.Н.Велецкая, там же. стр. 67.

(12) И.Я.Фроянов. "Волхвы и народные волнования в Суздальской земле 1024 г." В кн. *Духовная культура славянских народов. Литература · фольклор · история. Сборник статей к IX Международному съезду славистов.* Л., 1983, стр.19-38.

(13) Там же, стр. 27.

(14) Там же, стр.29.

(15) フレイザー著、永橋卓介訳『金枝篇』（一）、岩波文庫、193頁。

(16) 同書、195頁。

(17) 同書、200頁。

(18) И.Я.Фроянов. 前掲書、32-34.